

2 . 流域及び河川の自然環境

2 - 1 流域の自然環境

荒川流域には、様々な動植物が生育・生息している。

荒川は朝日山系の主峰である大朝日岳に源を發し、飯豊山系から流れる横川、玉川と合流し日本海に注いでいる河川である。この短い流程で2,000mの標高差を駆け下る荒川は、荒川峡などの渓谷美を形づくりながら、清流と呼ぶにふさわしい流れを湛えている。

北の朝日山系、南の飯豊山系の山並みからなる源流部は、磐梯朝日国立公園の一角を占め、雪田草原や雪崩低木林、ブナ林などを主体に原始的な自然をよく保っている。

上流域の山地帯はブナ、ミズナラの落葉広葉樹林に覆われ、荒川源流部にはブナ原生林も残されている。急峻な山腹を削る流れは深い渓谷を刻み、溪岸にはカエデ林やサワグルミ林が発達している。溪流にはイワナやカジカが生息し、小沢ではトウホクサンショウウオやモリアオガエル、カジカガエルなどが見られる。鳥類ではキセキレイ、ヤマセミ、アカショウビンなどの溪流性の鳥類の他、周辺の森林環境を反映してウグイス、オオルリ、コゲラ、ヤマガラなど多様である。朝日・飯豊の広大な自然を背景にイヌワシなどの猛禽類^{もうきんるい}も生息する。カモシカ、ツキノワグマ、ニホンザル、オコジヨ、ヤマネなど哺乳類相も豊かで、ギフチョウ、ベニヒカゲ、ムカシトンボ、オゼイトトンボ、メススジゲンゴロウなど稀産の昆虫類も多い。

小国盆地を流れる中流域では流れはやや緩やかになり、瀬と淵が連続する流れとなる。玉川上流部の温身平^{ぬくみだいら}などには、上流域同様ブナ、ミズナラの落葉広葉樹林に覆われ、ブナ原生林も残されている。また水際の砂礫地にはツルヨシが繁茂し、ヤナギの河辺林が帯状に分布する。川沿いの低地は水田として利用され、周辺の丘陵地帯にはコナラの二次林やスギ植林が広がっている。中流域の流れにはウグイ、オイカワ、アブラハヤなどが生息し、セグロセキレイやカワガラス、カワセミが姿を見せる。横川流域や大石ダム周辺ではクマタカの生息も知られている。

小国盆地を抜けると山形・新潟県境で赤芝峡、荒川峡などの渓谷を形づくり、関川盆地に達する。関川盆地から河口付近までは礫底が卓越し、自然豊かな河川環境と清流を維持している。下流域の河川敷にはヤナギ林やススキ群落が卓越しているが、冠水しやすい低湿地にはミソハギやタコノアシ、ワンドや水路跡にはヒメガマ、

ミクリ等が生育し、河口部の砂州には海浜植物群落も見られる。

河川生物相も豊かで、魚類ではサケ、サクラマス、アユなど海との間を往来する回遊魚が多く、底生動物相も水生昆虫が優占的に出現するなど清流環境をよく反映している。鳥類は、スズメ、カワラヒワ、ホオジロ、ホオアカなどの河川敷草地を反映した鳥類が優占するが、河口部や荒川頭首工の湛水域ではカモ類やシギ・チドリ類、サギ類などの水辺の鳥類が多数見られる。また河川の魚を専食するミサゴや海岸林等に生息するオオタカが姿を見せる。

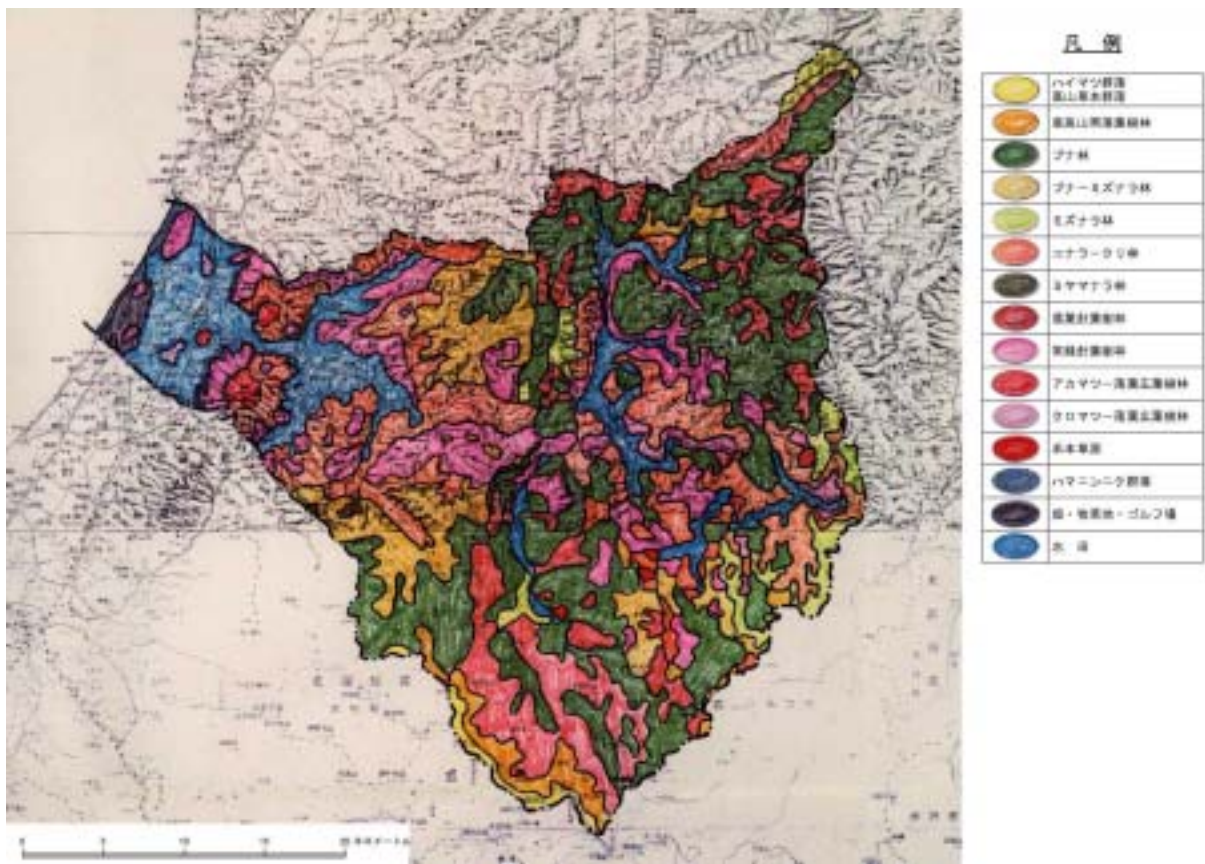


図 2 - 1 - 1 荒川水系現存植生図

出典：荒川環境調査（その2）業務報告書

昭和 62 年 3 月 羽越工事事務所

2 - 2 河川の自然環境

(1) 荒川の自然環境

< 植生 >

朝日・飯豊の山岳から一気に日本海に注ぐ荒川は清流と呼ぶにふさわしい流れを湛えている。しかし昭和 42 年 8 月の羽越水害により河辺の植生はほとんどが消失し、現在見られる植生は、その後回復してきたヤナギ林やススキ群落を主体とした若い植生で占められている。

河原には、タチヤナギ・カワヤナギ・シロヤナギ等のヤナギ林や、ツルヨシ群落、ススキ群落が卓越し、一部にはカワラハハコ群落も分布している。また冠水しやすい低水敷にはミソハギやタコノアシ等の湿生植物群落が見られ、ワンドや水路跡にはヒメガマ、ミクリ、サンカクイ、カンガレイ等の抽水植物群落が見られる。

< 動物相 >

荒川は、流程が短く急峻な山地から中流景観のまま河口に流れ出る急流河川であることから、自然豊かな河川環境と清流を維持している。

河川生物相も豊かであり、魚類ではサケ、サクラマス、アユ、カマキリなど海との間を往来する回遊魚の多さが特徴で、底生動物相も水生昆虫が優占的に出現するなど清流環境をよく反映している。

また山地が近いため、カモシカ、キツネ、テンなどが姿を見せ、ミサゴ、オオタカ、ハヤブサなどの猛禽類やヤマセミ、カワガラス、キセキレイなどの溪流性の鳥類もよく目にすることができる。

(2) 河川水辺の国勢調査結果から見た荒川の生物相

<魚介類>

荒川における平成7年度の魚介類調査では、38種の魚類と9種のエビ・カニ・貝類が記録されている。確認された魚類のうちエゾウグイは新潟県初記録である。

魚類は純淡水魚が17種、回遊魚が19種、汽水・海産魚が2種と、回遊魚が多いのが特徴である。また清流環境を反映してアユやイワナ・ヤマメ・カジカなどの渓流魚が豊富である。一方、河口～下流部には湧水を伴う入江状の湾入部が各所に存在し、イトヨやトミヨ、各種の稚仔魚の重要な生息空間となっている。



【エゾウグイ】

出典：H7河川水辺の国勢調査
(魚介類)報告書



平成7年10月4日付 新潟日報夕刊

<底生動物>

平成7年度の調査により確認された底生動物は176種にのぼる。分類群別に見るとカゲロウ目42種、トビケラ目36種、カワゲラ目20種、ハエ目17種、コウチュウ目16種、トンボ目12種などとなっており、全体的に水生昆虫が豊富に出現している。

急流河川の荒川は、河口・下流部においても礫底が卓越する清流を形づくり、このことが多様な水生昆虫の生息を支えることとなっている。

代表的な出現種としては、河口部でユスリカ類、イトミミズ類などが優占する他、モクズガニ、ゴカイなどの汽水性種が出現している。荒川頭首工付近より上流では、エルモンヒラタカゲロウ、コガタシマトビケラ、クロマダラカゲロウ、フタバコカゲロウなどの水生昆虫が優占し、通常では中・上流域に見られるような底生動物相を呈している。

< 植物 >

平成9年度の植物調査では105科562種の植物が記録されている。河川敷全体にススキ、オギ、ヨモギ等の多年生草本が広く分布し、木本ではカワヤナギ、シロヤナギ、タチヤナギ、オニグルミなどが優占する。河原にはツルヨシ、カワヤナギ、ススキ、オギ、カワラハハコ、オオイヌタデなどが優占し、河口部の砂州にはケカモノハシやハマニンニク等の海浜植物が見られる。

一方、荒川頭首工付近の山付き区間ではコナラやケヤキの落葉広葉樹林が成立し、シダ類やコシノカンアオイなどの山地性の植物も分布している。

確認された562種のうちの74種が帰化植物で、帰化率は13%となる。帰化植物のうちコヌカグサやクロバナエンジュは高水敷で群落を形成し、堤防付近では春にはセイヨウノコギリソウ、ブタナ、ヒメジョオン、オオキンケイギクなどの花が目立つ。

確認された植物のうちノダイオウ、コシノカンアオイ、タコノアシ、タヌキモ、オオニガナ、コバノヒルムシロ、イトモ、ミクリが特定種に該当し、タコノアシ、ミクリは特に豊富である。

< 鳥類 >

平成8年度の荒川の鳥類調査では29科93種の鳥類が確認され、平成3年度の調査結果と合わせ30科107種の鳥類が記録されている。

全体としてはスズメ、カワラヒワ、ヒヨドリ、ムクドリなどの河川敷草地や河辺林環境を反映した鳥類が優占しているが、河口部や荒川頭首工の湛水域ではカモ類やシギ・チドリ類、サギ類などの水辺の鳥類も多数見られる。また清流を好むキセキレイ、ヤマセミ、オシドリ、カワガラスなどが広範囲に見られる。

一方、山地が近いことからアカゲラ、エナガ、シシュウカラなどの山林性の鳥類も姿を見せ、秋には山間部から平野部へ移動してくるアトリ、マヒワなどの鳥類も多く出現する。

特定種としては、カンムリカイツブリ、チュウサギ、コハクチョウ、オシドリ、ミサゴ、オオタカ、ハイタカ、ハヤブサ、コアジサシ、ヤマセミ、カワセミなどが確認され、特に魚食性で河川に対する依存性の高いミサゴが多数出現することは特筆される。また河口部左岸では小規模ながらコアジサシの一時的な繁殖地が確認されている。

< 陸上昆虫類 >

平成 10 年度の調査では、1,176 種（クモ類 68 種を含む）が確認されている。荒川には海浜植物群落、ススキ群落、ヤナギ群落が分布し、山林も近いことから、チョウ目やコウチュウ目が多く見られる。また、大石川が合流するところの池ではクロイトトンボ、オゼイトトンボ、ハラビロトンボ、ギンヤンマなどのトンボ類が特に多く見られる。貴重種としては、前出のオゼイトトンボのほか、河口部でイソコモリグモ、荒川頭首工付近の山付き区間でムカシヤンマ、ヤンコウスキーキリガなどが確認されている。

< 両生類・爬虫類・哺乳類 >

平成 11 年度の調査では、両生類が 10 種、爬虫類 5 種、哺乳類 15 種が確認されている。調査区間最下流地点では両生類・爬虫類相は微少で、ワンド内の水辺では移入種のウシガエルしか見られなかった。上流に近づくにつれて両生類・爬虫類は豊富になり、春季調査の際には山塊が接近した急崖地で、山地性のタゴガエルが卵塊を保護しているのが確認された。

直轄管理区間で最上流地点の河川敷内の水路では、水路を泳ぎ上がるカワネズミが目撃され、カジカガエルやカモシカ、ニホンリスなどの山地性の動物が確認された。なお、最下流地点における冬季調査の際、河畔林内でノウサギのフィールドサインとともに飼育逸出のアナウサギの足跡と糞が確認された。

表 2 - 2 - 1 国勢調査で見つかった主な特定種・希少種

【植物】		
絶滅危惧 B類		コバノヒルムシロ
絶滅危惧 類		ノダイオウ、タコノアシ、タヌキモ、オオニガナ、イトモ
準絶滅危惧		ミクリ、コシノカンアオイ
【鳥類】		
レッドデータブック危急種	カンムリカイツブ、ミサゴ、オオタカ、ハヤブサ	
レッドデータブック希少種	チュウサギ、コハクチョウ、オシドリ、ハイタカ、コアジサシ	
【陸上昆虫類】		
特定昆虫類B		オゼイトンボ、ヤンコウスキーキリガ
指標昆虫類		ムカシヤンマ
絶滅危惧 類		イソコモリグモ
【両生類・爬虫類・哺乳類】		
絶滅危惧 B類		ホトケドジョウ



【コハクチョウ】

出典：H8 河川水辺の国勢調査
(鳥類) 報告書



【ホトケドジョウ】

出典：H11 河川水辺の国勢調査
(両生類・爬虫類・哺乳類) 報告書



【ノダイオウ】

出典：H9 河川水辺の国勢調査
(植物) 報告書



【タコノアシ】

出典：H9 河川水辺の国勢調査
(植物) 報告書



【ミクリ】

出典：H9 河川水辺の国勢調査
(植物) 報告書



【ムカシヤンマ】

出典：H10 河川水辺の国勢調査
(陸上昆虫類) 報告書



【ヤンコウスキーキリガ】

出典：H10 河川水辺の国勢調査
(陸上昆虫類) 報告書

表 2 - 2 - 2

特定種とは、調査実施の参考とするため以下の文献に記載されているものを整理したものです。

魚介類	<p>国・都道府県・市町村指定の天然記念物。 『絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律』国内希少野生動植物種の指定種。 環境庁編(1976)『緑の国勢調査報告書』における「すぐれた自然の調査」対象種。 環境庁編(1982)『日本の重要な淡水魚類』対象種。 環境庁編(1991)『日本の絶滅のおそれのある野生生物』 - 『レッドデータブック』掲載種。 その他、地方において特筆すべき文献(地方版レッドデータブックなど)掲載種。</p>
底生動物	<p>国・都道府県・市町村指定の天然記念物。 『絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律』国内希少野生動植物種の指定種。 環境庁編(1976)『緑の国勢調査報告書』における「すぐれた自然の調査」対象種。 環境庁編(1982)『日本の重要な昆虫類』における指標昆虫および特定昆虫。 環境庁編(1991)『日本の絶滅のおそれのある野生生物』 - 『レッドデータブック』掲載種。 その他、地方において特筆すべき文献(地方版レッドデータブックなど)掲載種。</p>
植物	<p>国・都道府県・市町村指定の天然記念物。 『絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律』国内希少野生動植物種の指定種。 「自然公園法」による指定植物。 環境庁編(1976)『緑の国勢調査報告書』における「すぐれた自然の調査」の貴重な種および貴重な群落。 環境庁編(1980)第2回自然環境保全基礎調査(緑の国勢調査)特定植物群落調査報告書における「日本の重要な植物群落」における特定植物群落。 環境庁編(1988)第3回自然環境保全基礎調査(緑の国勢調査)特定植物群落調査報告書(追加調査・追跡調査)「日本の重要な植物群落」における特定植物群落。 我が国における保護上重要な植物種及び植物群落の研究委員会植物種分科会(1989)「我が国における保護上重要な植物種の現状」掲載種。 その他、地方において特筆すべき文献(地方版レッドデータブックなど)掲載種。</p>
鳥類	<p>国・都道府県・市町村指定の天然記念物。 『絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律』国内希少野生動植物種の指定種。 環境庁編(1976)『緑の国勢調査 - 自然環境保全調査報告書』における「すぐれた自然の調査対象種」。 環境庁編(1983)『第2回緑の国勢調査 - 第2回自然環境保全調査報告書』における「稀少種」。 環境庁編(1991)『日本の絶滅のおそれのある野生生物』 - 『レッドデータブック』掲載種。 その他、地方において特筆すべき文献(地方版レッドデータブックなど)掲載種。</p>
両生類 爬虫類 哺乳類	<p>国・都道府県・市町村指定の天然記念物。 『絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律』国内希少野生動植物種の指定種。 環境庁編(1976)『緑の国勢調査報告書』における「すぐれた自然の調査」対象種。 環境庁編(1982)『日本の重要な両生類・は虫類』掲載種。 環境庁編(1991)『日本の絶滅のおそれのある野生生物』 - 『レッドデータブック』掲載種。 その他、地方において特筆すべき文献(地方版レッドデータブックなど)掲載種。</p>
陸上昆虫類	<p>国・都道府県・市町村指定の天然記念物。 『絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律』国内希少野生動植物種の指定種。 環境庁編(1976)『緑の国勢調査 - 自然環境保全基礎調査報告書』における「すぐれた自然の調査」対象種。 環境庁編(1980)『日本の重要な昆虫類』における指標昆虫および特定昆虫。 環境庁編(1991)『日本の絶滅のおそれのある野生生物』 - 『レッドデータブック』掲載種。 その他、地方において特筆すべき文献(地方版レッドデータブックなど)掲載種。</p>

2 - 3 特徴的な河川景観や文化財

(1) 特徴的な河川景観とその利用

荒川は、上流部の山形県側では朝日岳、飯豊山を望む盆地を形成し、山村の景観を形づくっている。その中でも新潟県境付近は、荒川峡、赤芝峡と呼ばれる峡谷が連なり、新緑や紅葉の時期には鮮やかに色づいた山並みが岩船ダム、赤芝ダムの湖水に美しく映り、荒川に沿って走る国道 113 号が「荒川もみじライン」と名付けられるほどの美しい景観となっている。

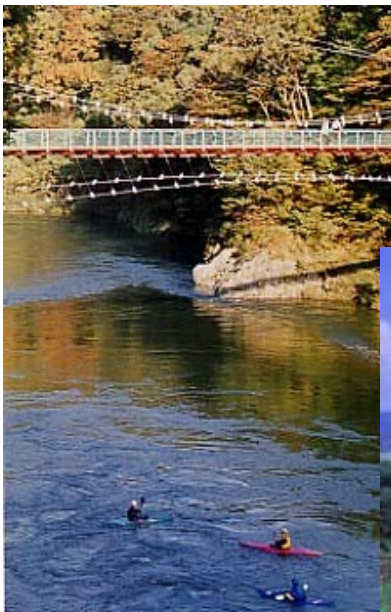
中流部は田園地帯を清流が流れ、飯豊山の山並みを背後に抱く典型的なふるさとの景観を形成している。特に眺望点である「お野立^{のだち}」からの風景は、荒川の清流と田園が周辺の丘陵の緑に調和してやすらぎを感じさせる。

下流部では、荒川頭首工上流の湛水面が優れた湖的水面空間を有している。

その後、荒川は新潟平野北端の田園風景の中を流れ、広大な水面を有する河口部を経て、日本海へ注いでいる。

また、支川の大石川上流には大石ダムがあり、透明な湖水と湖岸の緑と切り立った岸壁が神秘的な景観をかもしだしている。

荒川峡



赤芝峡



お野立



出典：羽越工事事務所 30 周年記念誌

「羽越ものがたり」(羽越工事事務所)

未来へつなぐ荒川(羽越工事事務所)

(2) 観光・景勝地

荒川流域における観光・景勝地は、代表的なものとして大石ダム周辺に広がっている大石ダム湖畔県民休養地を始めとする周辺施設、わかぶな高原スキー場、荒川峡と赤芝峡がある。

また、中流部ではお野立公園と丸山公園をつなぐ丸山大橋からの眺望、下流部には平林城跡や縄文時代の竪穴住居遺跡などもある。

その他に、上流部では飯豊温泉や小国温泉等、中流部では鷹ノ巣^{たかのす}、高瀬^{たかせ}、雲母^{きら}、湯沢^{ゆさわ}等「えちごせきかわ温泉郷」と呼ばれる温泉が点在しており、これらの年間利用者は約27万人と多くの観光客を集めている。

(3) 荒川流域の主な文化財・史跡

- 国指定重要文化財 -

< 渡辺邸（関川村下関） >

江戸時代に近郷の大庄屋として多くの事業で財をなした旧家の屋敷。広い土間、高い天井、重々しい梁組、いろいろのある茶の間等、その規模と格式が江戸時代の豪家の特色を示しており、昭和29年3月に国の重要文化財に指定された。また後に廻遊式の庭園も国の名勝に指定されている。



出典：関川村パンフレット

< 乙宝寺（中条町乙） >

736年（天平8年）に開かれた新潟屈指の古刹。「今昔物語」にも登場し、きのと寺や猿供養寺の別称で親しまれている。境内には江戸時代に建立された三重の塔があり、国指定の重要文化財に指定されている。かの松尾芭蕉が「奥の細道」の旅の途中で参詣し、「うらやまし浮き世の北の山桜」の句碑もある。



出典：中条町パンフレット

2 - 4 自然公園等の指定状況

荒川流域では、自然公園法に基づき荒川中流部が磐梯朝日国立公園に指定されている。また大朝日岳周辺及び飯豊山周辺地域は、磐梯朝日国立公園の特別保護地区に指定されている。

特に、荒川中流部の代表的な景勝地である荒川峡、赤芝峡は、奇岩と清流、地層の変化に四季それぞれおもむきがあるが、夏にはキャンプやハイキング等に利用され、秋の紅葉時の景観は格別であり、多くの観光客を集めている。

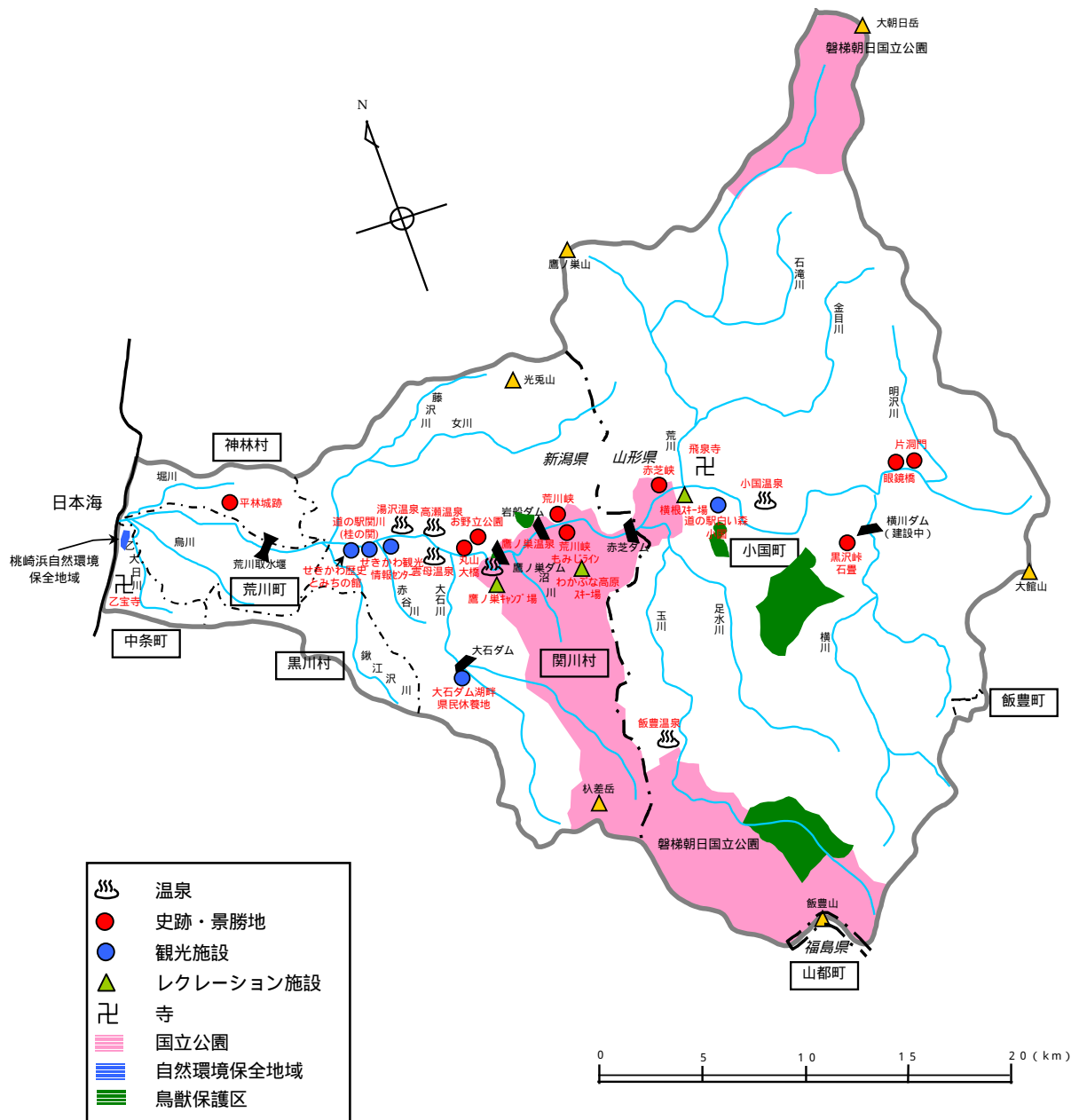


図 2 - 4 - 1 荒川流域観光・景勝地等位置図